

## 野鳥を眺めて想うこと

滝 沢 由美子

最近の我家では毎朝皆の注目を集める場所がある。それはベランダの柵の上、今冬初めて設置した小鳥の餌台である。25×30×3cm位、発泡スチロール製の函の蓋を利用したものだが石製に見えるように色を吹き付け、端に高さ50cm程の柿の枝を立てて枝には、みかんやりんごを刺し牛脂を吊る。中に仕切りがあり広い方には水を入れ小石を数個配置し、狭い方には飼鳥の餌、くるみなどを置くという具合である。今のところ、喉が黄色、鶯より少し緑が鮮やかで目のまわりが白いメジロ、帽子と首、喉から腹へとネクタイをしたように真黒で、頬、体は白、緑灰色の翼に一本白の横筋が特徴のシジュウカラ、頭から長めの尾まで25cm位、全体に褐色で咽と腹は白っぽく、胸に小さな斑模様のあるヒヨドリが常連で、いずれも番らしく2羽づつでやって来る。近所ではキジバト、カワラヒワ、オナガなどを見かけるし、季節にはウグイス、カッコウの声を良く耳にする。ここは武蔵野市内、JR新宿駅から電車で約20分の武蔵境駅南側、かつての井口新田内である。我家の南を東西に江戸道が走り、この道沿いに井口新田が、その北に境村および境新田が近世に拓かれた。その面影は樺の大木を擁した何軒かの農家や土地割に残る。まだ芝生や野菜畑が大分あり、駅まで徒歩7分の道は筆者の気に入っている道で途中からたちの垣根に囲まれた果樹園が広がっている。

この辺りは武蔵野新田の分布地域であり、また、江戸近郊一円に広がっていた御鷹場でもあった。詳しくは年代により変更はあるが、境村同新田とその北東、五日市街道沿いの関前新田以東は御挙場(将軍家の御鷹場)であり、井口新田、その南の野崎、大沢、北西の梶野、下小金井各新田以西北は尾張藩の御鷹場であった。筆者が日常利用するスーパーマーケット前の交差点とバス停の名が塚で、そのそばの道路際、一段高い一坪程の所に大鷲神社の小祠がある。これが鷹場に関係があると古文書の勉強を始めてから気付いたが、杭の書上帳に井口新田預りのものが二つある。その一つの石杭が、ここより東三十間、二ツ塚にあった

ものを明治初年道路改修の為移されて、この祠に収蔵されていることを最近知った。御挙場境傍示杭についても境、関前など各村々が預っていた。

鷹場内では種々の規制を受けたことが御鷹場御法度證文などから知られる。道や橋の整備、鳥や魚を採る者や鳥商いの監視は勿論、寺社、家、水車などの普請は差込に従うこと、鳥獣の追立て禁止、従って、案山子を立てたり威鉄砲や棒、竹、鎚で猪や鹿を追散らすことは許可が必要であること、開帳相撲の類、神事祭礼など大勢人の集まる場合は予め訴え出ること、御成時は犬猫を繋ぐこと、親類でも餌差を三日も泊めてはいけないこと等々たいへん細かく規制されていた。また、御成、御出の際の負担も、御道具持送り・持返し人馬、御場拵・道拵・枝おろし人足、勢子、加勢子、御焚出所働人足など一回につき一つの領(境村迄の中野筋は野方領)から何百人もが差し出された。領単位で江戸城に上納していたものには、野方領からは野菜の種、杉や桃の葉、枯松葉、枝木、よもぎ、わらび、枸杞の葉、螻、えびつる虫、松虫、鈴虫、いなご等種々あり、これらを採集する百姓の手間はたいへんであったと思われる。

ベランダの手の届きそうな所で餌を食べている鳥のかわいい様子を眺めながら、子供でも魚とりや小鳥を飼うのを禁じられていた鷹場農村のたいへんさ、しかし野生の動植物が豊かに息づいていた時代の平安さを想い、さらに日本の水土に合った経済、自然の再生産で賄っていた経済から外国の資源エネルギーを消費し、それに依存する経済へ転換し、食糧、木材までも国外に依存している現代、しかし我々の身近な日常は便利で贅沢になった現代を考え、今この時期こそ経済成長、利純追求が当然という我々の価値観を変えるよう努力すべきではないかと思う。ともあれ、餌台を設けるにはそれなりの覚悟が必要で、常に餌を供給し、掃除に気を配らねばならない。特に掃除はかなり頻繁にしなければならないが、我家には台の設置から掃除までする人は居るので、筆者は専ら“私、楽しみ想う人”を決めこんでいる。